

1月のおはなし

「だるま課長」

課

長昇格の内示を受けた。ただし関係団体に出向しての昇格だが、同期はおろか、三つ上までまだ課長になったやつはいない。俺の能力がようやく認められたということか。

俺は辞令を受けて勇躍、日本数理計算研究機構に赴いた。旗下の団体の筈だが、よくは知らない。部下になる課長補佐が、玄関で俺の到着を待ち受けていて、執務室までの道すから業務説明をすうと言う。



「満願成就した後のだるまはどこにいくのか、疑問に思ったことはないですか？」

課長補佐はそう話し始めた。こいつは何を言っているのだから。俺はとりあえず話を続ける

よう促した。

「だるまは年間二〇〇万個生産されているです。それらは皆、願い事が成就したら寺か神社に持ち込まれるです。二〇〇万個が、です。だるま人形は禅

宗の祖を模したものではありませんが、天変地異の邪気を払う呪物として生まれたもので、仏教というよりは民間信仰に近いです。だるまを売る達磨寺はともかく、他の寺や神社に受け取る言われもないです。スペースもないです」

説

明は続く。

「最大の問題は、一年経っても願いを果たさなかつただるまです。迂濶に捨てることも出来んです。なんせ、いま達成していないというのは将来の可能





性まで否定するものではないか

らです。それがいつまでも願いを達成できない、いわゆる「デフォルトだるま」なのか、見ても触っても判断できません。

そこで登場するのが数理計

算です。簡単に申しますと、まず将来達成するであろう年数を、エックスとしまして未達成のリスクであるティーで乗じた上で運用利率エヌで割り戻して、そこから管理に伴う機会費用を差し引いて国民生活に寄与しうるだるまの現在価値を求めます」

俺

は我慢ができなくなつて尋ねた。

「で、それが私の仕事とどう関係が？」

課長補佐は胸を張った。

「我が日本数理計算研究機構、繭型張子利活用促進部はそうしただるまの返戻を受け付けるとともに、管理を行っております。課長の管財課は、計算課がそのような計算によって導き出した償却期限まで、倉庫に保管された返戻だるまを適切な温度湿度で管理することが主な業務になるです」

課長補佐はそう言つて俺に、モコンを手渡した。だるまの管理？そこには「霧が峰」と書かれていた。

廊

下の行き止まりに管財課と書かれた扉があり、扉を開けると広大な事務室に机がひとつ置いてあった。



「これが課長のデスクです。あ、私は計算課と併任でして、あまりこちらへは参りません」

机の上には赤い小さなだるまだけが置かれていた。課長補佐が俺の視線に気付いた。今まで慇懃に対応していた課長補佐の口元が微妙に歪んだ。

「あ、それは私からの個人的なプレゼントでして。お使いになりませんか？」

そ

のだるまの両眼はまだ開いていなかった。■

5



妄想の地平線

1月のおはなし

文 ハヤシアキオ 絵 凹工房

本書の無断複写・複製・転載を禁
じます。

© HAYASI AKIO & BOKOKOUBOU